

いじめ問題解決のステップ

ファーシュタ・メソッド(緊急時の方法)

1. 問題を発見する ⇒ チームで対応

- ・教師が発見
- ・他の児童生徒が相談
- ・本人や保護者からの相談

2. 事実を知る = 情報収集 ※いじめっ子(グループ)に知られないように注意！

【誰から】

いじめの被害者、被害者の友人、中立的な子ども、
部活顧問、被害者・加害者の過去・現在の担任、ほか

【内容】

いじめメンバー、リーダー格は誰か
いつ頃から、どんな場所で、どんないじめが、どのくらいの頻度で、あるか

3. 問題がどうして起きたのか、直接の原因や背景を探る

※ただし、決めつけない

- ・いじめられる側の要因、背景

※いじめめる側を指導するための情報として活用。いじめられる側を責めない
(障がい、転校生、外国籍、他の子どもとは違う特徴など)

- ・いじめめる側の要因、背景

(家庭の問題、ストレス、仲間に同調、気が弱いなど)

- ・緊急度、深刻度の判断 ※もっとも危機感を持っている人間の判断を重視

4. 解決のためのアイデアを集める

- ・被害者を守る方法
- ・加害者へのアプローチの仕方
- ・学級、学年、部活動等の環境改善

5. 解決の実行計画を立てる

- ・目標設定 被害者を守ること、いじめをやめさせること、再発防止など

- ・役割分担

- ・いつ、どこで、誰が、どのような形で実行するか

- ・気をつけなければならない点(さまざまな影響・結果を熟慮)

※報復の可能性や対応策を予め考えておく

- ・保護者には、いつ、誰が、どのような形で報告するか

※被害者を守る(自殺防止を含む)ため、被害者の保護者にはできるだけ早く情報提供し、
学校としての対応も話しておく

※加害者の親への情報提供と指導の依頼は、個別聞き取りを終えて、いじめの内容が
確定してから話す。でないと、調査ができなくなったり、話し合いがこじれることも

6. 解決アイデアを実行する

- ① 一斉、個別に、教師と生徒が対話する（口裏合わせをさせない、言い訳を準備させない）
- ② 自分たちのもっている情報の範囲で質問したり、推測して、事実を聞き出す
- ③ 学校として、いじめに気付いていること、重大な問題だととらえていること、すぐにいじめを止めなければいけないこと、などを話し合う
- ④ 自分たちのやったことを時系列で書きださせる
- ⑤ 他のメンバーや証言とつじつまがあっているか、チームで情報交換し、再度質問
- ⑥ 反省や謝罪を形にする方法を話し合う(ただし被害者の気持ち最優先)
- ⑦ 次の話し合いの期日を決めておく
- ⑧ いじめを止めない場合や、報復をした場合のペナルティについても話しておく

※目的を再確認

※聞き取りは、教師1～2人 対 児童生徒1人(大勢で威圧感を与えない)

※情報源を絶対に明かさない

※責めたり、怒鳴ったり、暴力を振るったりせず、冷静に話し合う

※最初の話し合いは、事実を確認することに集中する。指導はあとで行う

※決めつけない。ただし、いじめは隠されるもの、加害者は否定するものと心得る

事前の情報収集を活用する

※加害者の話をよく聞く。ただし、言い訳に惑わされない

※1回の対話は長くても1時間を超えないように気を付ける

※いじめは相手の問題ではなく、自分の心のなかにあることに気付かせる

※追いつめすぎない(とくに反省心が見られるとき)。加害者への思いやりも忘れない

7. 効果をチェックする

- ・いじめ被害者、加害者について、教師間で情報を共有し、注意深く観察を続ける
- ・いじめ被害者、加害者に、効果を確認する
- ・いじめ加害者の問題の深刻度合によっては、定期的に話し合いの時間を持つ
- ・他の児童生徒、教師からも情報収集する
- ・いじめが継続していたり、報復があった場合、前回のやり方のどこに問題があったかを洗い出し、新たな対応策を練る

※いじめが収まらない場合、加害者の保護者との対話を強化する

警察や児童相談所との連携も視野にいれる

※暴力、恐喝は、繰り返すことが多いので、とくに注意が必要

【参 考】

「子どもとまなぶ いじめ・暴力克服プログラム」 武田さち子著 合同出版 P144

「福祉先進国スウェーデンのいじめ対策」 高橋たかこ著 コスモヒルズ